



Title	社会教育を考えて
Author(s)	安田, 陽子
Citation	北海道大学教育学部社会教育研究室報, 1975, 98-106
Issue Date	1976-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/28581
Type	bulletin (article)
File Information	1975_P98-106.pdf



[Instructions for use](#)

社会教育を考えて

日本社会教育学会々員 安田陽子

1

社会教育を考えて、そこに展開されている事柄を求めて、資料を集めに、ある時、文部省、都庁、世田谷区役所を訪ねた。都成人大学校や区青年学級の講師補佐をした経験が出合いの初めであった。十数年前になる。以来、教職（私立小学校）を決定した根底にも常に社会教育があり、母親との面接にもひき寄せて考えを進めていた。

そして今、北大の研究室へ参加を許された。去年は教室が士別市民大学構想に協力し、調査が進められた。私は福祉関係と老人世帯調査に参加し、他の調査員との総合討議に耳を傾け、地方公共団体の社会教育に出合ったことが、今後の研究に一步を踏み出しました。

2

士別市の教育委員会が行ってきた実践を調査して、社会教育が住民に呼びかける回数にもなって返ってくる住民の声が大きくなる。演出の方法もあるのだが、社会教育が動いていることを感じた。実践が裏うちし評価につながる分野での研究で、調査の結果から意識、思考を量的に計ることが可能である。

社会教育の主体者は社会にある個人で、個人の集合を集団に、それが社会の構成員となる。個々人の自己教育を考える。職業を生産関係に結びつける人間関係と居住地の地縁関係にとらえ、社会学と民俗学に拡げ、さらに生活面が加わって社会福祉が社会教育の隣接部分にくる。全体の中の個人を求めて、政治機構が住民福祉にひきつけられるとするのもこの点から出る。

他方、生産機構の中で種々の規定を受けた人格が展開する社会と教育。人間が選択する生産機構の社会と教育。労働者の生産点が生活を規定する要素は学校教育の視点とは別に社会人を教育する。労働力再生産の維持を保つそれぞれの方法に、施設、設備の利用もある。地方自治体が展開する講座、学級、体育は市民の教育要求に答える方法である。個によりそつて出発した教育が社会機構の異なる中であっても主体者に参与する教育。現在社会の生産を支えて働く労働者、そして消費者であり住民である。

3

図書館、博物館の小樽地域での役割を考えてみよう。市民の受け止めはどうだろう。傾陽小樽と云われた時代を経て、現在は駅前再開発や石狩湾新港、小樽港と運河問題をかかえ、新市長は教育問題、福祉予算を前面に押し、累積赤字財政をかかえた施政は大変である。体育館も、婦人会館もある。総合福祉センターも活動している。各施設は館長に委任運営され、予算が組まれている。中小商工業都市であるこの地域で、ここに従事している労働者は余暇時間をどう利用しているだろう。施設利用者数は一般に増えていると数は出ている。公報や新聞に告示している。

・図書館 市民に親しまれている建物の旧さの中に収められている蔵書は誇るべきものが多い。図

書館が高校生の勉強室として良いか悪いか、という議論に従い、2階閲覧室が閉められたり開かれたりしていた。一般閲覧者はいつも多くはない。移動図書館の車が入って2年目、児童貸出しが大幅に増え、児童図書購入費も全予算の半分以上をふんで年度計画をもった。児童文庫が増えた。母と子の読書の輪が広がるように。

・博物館 歴史の背影を建物にひめ、暖房のない展示室は寒さをこらえて接しなければならない。建物を訪ねる道順も小樽の歴史をたどる。総合博物館として生れたが一人の学芸員がすべて見守る不都合は、一時閉館か？とも問題になった。周辺地域の小学生が見学のしおりを片手に見学旅行のコースに組む。利用数は上昇を続けている。が中学生の団体見学者はほとんどないと云う。団体行動を取りにくくしている学校教育の現状が考えられる一場面である。青少年科学館にも中学生が少ないとは何か問題があるのではなからうか。

大人も喜んで何回でも見学できる内容を小樽は持っているのに、その整備が充分でない。時間と費用を途方もなく要するこの種の仕事は社会教育の深さであろう。心の故郷が建物に埋まっている。その発見と感動を小樽にこそ期待したい。一般にはその存在も内容もまだまだ知られていないのが現状である。

これらの施設が社会教育の場で一体化されていないのが気になる小樽の状態で、社会教育課の事業も共通部分が少ないのはどうしたものだろう。例えば相互に施設を利用して行事が計画されたことを記憶していない。社会体育も小樽にジャンプが育った時代とは役割がちがってきている。

小樽には水族館もあるがここではふれない。

4

社会教育が、今日より市民の日常に根づくために小樽地方に社会教育を育てる会を作りたい。その準備を進めている。この言葉は小樽市民にはまだなじみが薄い。意識をもって参加した人以外には、おそらくおぼろげにしか受け止められていないのではないか。その内容を言葉で説明しようとしても言葉が足りない。宣伝を切り出すには気はずかしい。社会教育従事者の数が限られている。こんなところに原因があるのではないか。地域社会に根を張った社会教育が成長することを願っている。

(現在小樽市在住)

留岡清男著作・目録（第一次）

一 著書・共著・編著

- 教育における計画化の概念（三井透編『教育計画』 1957年）
教育農場50年 岩波書店 1964年
生活教育論 西村書店 1940年

二 研究論文・調査報告

- 感化事業（岩波講座 教育科学10 1932年）
農村教育運動（岩波講座 教育科学20 1933年）
村づくりと人 北海道大学教育学部紀要 第5号 1957年
労作教育思想の再検討（「教育」1934年10月号）
児童保護法に於ける文政型と恤救型（「教育」1935年11月号）
阿部重孝論（「教育」1936年1月号）
児童観と生活教育（「教育」1940年1月号）
村づくりの問題点（北海道大学専門講座記録「村づくりの調査と計画と実施の方法」
北海道大学教育学部 北海道教育庁社会教育課 1958年）

三 研究動向・書評・解題・報告要旨

- 教員払底と教員待遇改善の指標（「教育」1940年3月号）
教育科学研究会の使命と現状（「北海教育評論」1940年4月号）
城戸幡太郎著「民主教育の立場から」（「北海教育評論」1940年4月号）
教育科学研究協議会の使命（「教育」1940年7月号）
新教育体制の促進（「教育」1940年10月号）
田村隆治著「日本農村の文化運動」の書評（「教育」1942年8月号）
教育研究を打診する（「北海教育評論」1954年10月号）
講義「生産力としての学力」（「北海教育評論」1963年9・10月号）

四 評論・解說的論文・随筆

- ブラジル移民と教育問題（「教育」1934年7月号）
汎太平洋新教育会議を杞憂す（「教育」1935年7月号）
松永氏の報告を讀みて（「教育」1935年11月号）
「宗教教育答申案」の歴史性（「教育」1935年11月号）
転向学生と復校拒否 中等教育の後始末（「教育」1936年3月号）
母子扶助法と商店法（「教育」1937年1月号）
石井亮一先生と其の事業（「教育」1937年2月号）

職業人の採用・資格検定期則の条件分析（「教育」1937年3月号）
 文部省をあばく（「教育」1937年3月号）
 国民健康保険法案は何を示唆するか（「教育」1937年5月号）
 社会科学教育運動（「教育」1937年6月号）
 阿部重孝先生にささぐ（「教育」1939年7月号）
 旭川の教育人と北方教育社（「教育」1939年8月号）
 蒙疆の教育と文化（「教育」1939年11～12月号）
 北海道教育と酪農文化（「北海教育評論」1940年1月号）
 瀬棚支部会員諸賢に呈す（「北海教育評論」1940年7月号）
 国民運動と国民教育（「教育」1941年12月号）
 わがまことの教育（「北海教育評論」1953年3月号）
 見えざる手（「北海教育評論」1953年7月号）
 苦言と要望 第8分科会の諸兄におくる（「北海教育評論」1953年11月号）
 教育と経営（「北海教育評論」1955年1月号）
 若き教師におくる書（「北海教育評論」1955年1月号）
 北海道教育風土記（「北海教育評論」1955年2月号）
 北斗開拓農業協同組合——北海道教育風土記2——（「北海教育評論」1955年3月号）
 村政と教育——北海道教育風土記3——（「北海教育評論」1955年5・6月号）
 冬島の青年グループ——北海道教育風土記4——（「北海教育評論」1955年7・8月号）
 岐路にたつ浅海漁業——北海道教育風土記5——（「北海教育評論」1955年9月号）
 教育の断層と産業教育——北海道教育風土記6——（「北海教育評論」1955年10月号）
 責任と原因の分離について（「北海教育評論」1956年1月号）
 地域社会にいでむ学校——北海道教育風土記7——（「北海教育評論」1956年1月号）
 根室地区の教育点描——北海道教育風土記8——（「北海教育評論」1956年7月号）
 村づくりと人間——北海道教育風土記9——（「北海教育評論」1956年9月号）
 農業改良普及と学校教育(1)～(2)——北海道教育風土記10～11——（「北海教育評論」
 1956年10～11月号）
 父母と教師の結びつき——北海道教育風土記12——（「北海教育評論」1957年3月号）
 凶漁にいでむ水産教育——北海道教育風土記13——（「北海教育評論」1958年1月号）
 谷口江差町長に訴える（「北海教育評論」1960年7月号）
 計画教育ということ（「ばいであ」第2号 1961年）
 奮発心はどうしたら起きるか(1)～(4)（「北海教育評論」1962年3月号、4・5月合併号、
 6・7月合併号、8月号）
 三つの課題(1)～(2)（「北海教育評論」1963年7月号、11・12月合併号）
 校内雑記（「北海教育評論」1967年10月号）

五 座談記事

歌笛の産業教育について、教育の断層をさぐる （北海道教育風土記をめぐって）
（「北海教育評論」1956年4月号）

六 講演・シンポジウム発言・その他

「村づくりの調査と計画と実施の方法」専門講座、現地演習記録（総合討議）
北海道大学専門講座記録「村づくりの調査と計画と実施の方法」北海道大学教育学部 北海道
教育庁社会教育課 1958年。

わが教育・わが経営（「北海教育評論」1960年1月号）

特集パイロット・ファームと教育（意見発表） 第2回北海道教育社会学会におけるシンポジ
ウムの記録 （「北海教育評論」1960年2月号）

※集録した雑誌は、「北海教育評論」（北海教育評論社）および「教育」（岩波書店）である。

研究室日誌（昭和50年度）

- 4月3～13日 熊石町調査参加—出稼ぎ問題—（神田）
 22日 社会教育施設見学（道立図書館～江別市中央公民館）
- 5月 コミュニティ指定地域実態調査
 ○深川市（16～17日） ○清水町（21～23日） ○千歳市（24日）
- 6月 7～8日 日本社会教育学会六月集会（東京）参加、報告（山田）「地域におけるコミュニティ研究の課題と方法」
 15～16日 全国農民大学交流集会（山形）参加（美土路、藤田）
 20日 洞爺村予備調査
 28日 士別市予備調査
- 7月 8～9日 研究合宿、テーマ
 ○「地域と教育」 ○「農村における労働力政策の展開」
 9日 生協問題学習会（話題提供、札幌市民生協・森本氏、北大生協・金子氏）
 16～21日 学生社会調査実習（洞爺村）
 25日 学部研究交流会、報告（山田）「コミュニティ政策と社会教育」
 29～30日 昭和50年度北海道地区社会教育主事講習（於：北海道教育大学旭川分校）
 —講師として参加（美土路、山田）
- 26日～8月13日 青森県調査（出稼ぎ問題）（神田）
- 8月 2～4日 第14回北海道民間教育研究集会（帯広）参加（美土路、山田、高倉、木村）
 5～7日 士別市予備調査（高倉）
 11～日 別海町調査（美土路、山田、木村、藤田、他学生2人）
 ○農民の技術習得に関する実態調査 ○農村婦人の生活に関する実態調査
 ○農協・役場・改良普及所等の機関調査
- 25～29日 大学院集中講義（藤谷俊雄講師）
 31～9月1日 社会教育研究全国集会（長野）参加（木村）
- 9月20～21日 市民大学シンポジウム（士別市）
 ○経過報告と今後のとりくみ（高倉）
 ○憲法・教育基本法・社会教育法の理念（山崎真秀助教授）
 ○社会教育の現状と社会教育計画の課題（美土路）
 ○社会体育の現状と動向（三好洋二講師）
 ○コミュニティと社会教育（山田）
- 10月 1日 社会教育施設見学（小樽市体育館～博物館等）
 3～6日 士別市調査（美土路、山田、三好、高倉、木村、藤田、安田、他学生3人）
 25～27日 日本社会教育学会大会（京都）
 ○消費者教育における対抗関係と到達点（美土路）

- コミュニティ政策と社会教育（山田）
- 一般行政で行なわれている社会教育事業実態（高倉）
- 出稼ぎ送出地域における生活・教育問題（神田）
- 地域農業展開下の農村婦人の生活と学習（木村）
- 地域の農業生産力構造の変化と農民の生活・技術要求（藤田）
- 11月 8～9日 士別市調査現地報告会
- 12月22～23日 研究合宿（「士別市における『市民大学講座』開設計画立案に関する助言」作成）
- 1月 6日 北海道農業教育研究会設立総会（於：北大教育学部）記念講演（美土路）参加
- 7～8日 全道高等学校職業教育研究集会参加（山田）
- 2月 7～8日 北海道教育学会研究大会、報告、参加
 - 70年代における地域社会教育計画論への接近（高倉）
 - 出稼ぎ農民問題と職業訓練（神田）
 - （学生部会）
 - 農業近代化と農業改良普及制度の役割について（柳田）
 - 農家婦人の労働と生活—洞爺村の実態分析を中心に—（千葉）
- 3月18～19日 北海道農業経済学会研究大会報告
 - 根釧酪農専業地帯の酪農民の現状と民主的発展の探究（木村）

<昭和50年度関連講義・ゼミ>

（学生）

- 社会教育論（50年度前期）（担当 美土路）
- 農民教育論（50年度前期）（担当 山田）
- 教育学概説Ⅳ（50年度後期）（担当 山田）
- 農業協同組合論（農学部・通年）（担当 美土路）
- 社会調査実習（ゼミおよび調査）（担当 美土路、山田、高倉）
 - テキスト—エンゲルス『イギリスにおける労働者階級の状態』
- 基礎ゼミ
 - テキスト—マルクス『賃労働と資本』（英語版）
- ゼミ（専門演習Ⅰ、Ⅱ）（担当 美土路、山田、高倉）
 - 前期テキスト—千野陽一他編著『現代社会教育実践講座（第1巻）』
 - 後期テキスト—レーニン『ロシアにおける資本主義の発展』

（大学院）

- 大学院集中講義—講師・部落問題研究所所長 藤谷俊雄氏
 - テーマ『部落問題』
- 大学院ゼミ『協同組合論』（担当 美土路）
 - 前期テキスト—近藤康男著『協同組合原論』
 - 後期テキスト—井上晴丸著『協同組合論』

- 大学院ゼミ『資本論』（担当 山田）
- 研究室会議（定例、月曜）

編 集 後 記

わたくしたち北海道大学の社会教育研究グループがどんな勉強をしているのか、その一端（学生の卒業論文の概要・感想・教官・大学院生の研究ノートなど）をお知らせして、関係者の理論的・実践的批判をいただき、さらにわたくしたちの研究と教育を発展させたいと考えて、研究室報をつくりました。

とくに、広い意味での社会教育実践に奮闘なさっている方々との共同の場が開けることを望んでいます。

かねてから研究室では、現実の社会教育の舞台においてみられる実態や変化について、現場からの御協力をいただきながら、おりにふれて実施してまいりました。そして、独自に報告書をまとめて、可能なかぎり得られました資料を現場に反映していただくべく、印刷配布してまいりました。既に過去3回発行しております注。

今回は冒頭に述べました考え方の下に、従来のものとはスタイルを異にしております。

さいわい、研究室の教官、大学院及び実際に共同して研究に参加している学外者や卒論をまとめた4年目学生全員から原稿を得ることができました。ただ8年目ゼミナリストからの原稿が1本もよせられなかったことがさみしく感ぜられます。

なお、本報巻末の留岡清元教授文献目録の作成については、大学院博士課程の神田嘉延、修士課程の藤田昇治が、全体の編集には研究室助手高倉嗣昌、前出大学院2名及び同博士課程の木村純が主に担当いたしました。

本報印刷発行にあたって、学部事務や印刷関係者の多大な協力を得たことに謝意を表するものであります。（高倉記）

- （注）
1. 都市青少年集団活動調査一昭和43年3月
 2. 社会教育主事についての基礎調査報告（I）一昭和46年3月
 3. 社会教育主事に関する基礎調査報告（II）一昭和50年3月

北海道大学教育学部社会教育研究室報

発 行 者 北海道大学教育学部社会教育研究室
（札幌市北区北11条西7丁目）

印 刷 者 北大生協プリント部

発 行 日 昭和51年3月31日

<非 売 品>